



別府市友好50周年訪問ツアー

熱海市長 齊藤 栄

11月上旬、2泊3日で市民の皆さん61人と共に大分県別府市を訪れました。別府市と姉妹都市締結50周年を記念するとともに、4月の熊本地震で観光産業に影響を受けた別府市を応援するためです。私たちは地元の方で賑わうイベントの席上で、長野恭紘（のぶひろ）・別府市長から紹介され、熱烈な歓迎を受けました。別府市役所への訪問や交流夕食会などの公式行事あり、「別府地獄めぐり」の市内観光ありと盛りだくさんで、少々忙しいかなと心配していたのですが、参加された市民の方から「大歓迎を受けてうれしかった」「本当に楽しかった」との声をいただき、正直ホッとしました。

50年前と言えば昭和41年に当たります。熱海駅に新幹線が開通し、東京オリンピックが行われたのが昭和39年です。この頃、全国の温泉地の中で最も多くの観光客が訪れていたのが熱海、次いで別府でした。それから半世紀が経ち、状況は大きく変わりました。別府市は人口約12万人、広大な平地を有するなど、熱海と違いはあるものの、観光客数の減少、商店街の衰退、人口減少など同様の課題を抱えており、知恵を出し合うことができるのではないかと感じました。

私は交流夕食会の席で、熱海そして別府が再び全国の温泉地をリードするのだという気概を込めて、「50年前と同様に、温泉観光地の東西の横綱になれるようお互い頑張りましょう」とあいさつしました。別府市と切磋琢磨しながら、熱海市のさらなる発展を目指してまいります。



世界ジオパーク国際会議

熱海市長 齊藤 栄

先日、イギリスで行われた「世界ジオパーク国際会議」に参加しました。会議はロンドンから西に約300キロ、イングリッシュ・リビエラと呼ばれるヨットハーバーを持つ美しいリゾート地で開催されました。この地域は既に世界ジオパークに認定され、特色ある地形・地質に加え、西ヨーロッパ最古の人類が見つかった洞窟などがあります。ちなみに会議場のあるトーカーという町は、「ミステリーの女王」と呼ばれたアガサ・クリステリーの生誕地です。

会議は4日間にわたって行われ、基調講演、パネルディスカッション、テーマ別に行われる分科会、ポスターセッション、そしてジオツアーなどがありました。私は世界のジオパークを理解する貴重な機会と考え、くまなく出席してきました。

この国際会議に参加して私が非常に強く感じたことは、ジオパークの目的は単に「観光振興」にとどまらないということです。例えば「文化」や「防災」という視点で、大地（ジオ）の育んだ資産を地域の持続的な発展につなげることも重要だということです。この考えは世界ジオパークの認定が、昨年からユネスコ（国連教育科学文化機関）の正式事業となったことによりさらに強まったのかもしれない。

伊豆半島ジオパークは、現在世界認定を目指しています。今回の国際会議参加の経験を生かし、伊豆半島が世界にアピールできる観光地となるため、そして文化や防災の分野にもさらに貢献できるように、関係15市町が一致団結して取り組んでまいります。



市長就任10周年

熱海市長 齊藤 栄

熱海市長に就任して、この9月でちょうど丸10年を迎えました。長年の夢がない、全国有数の「熱海市」という現場を持ち、大きなやりがいと誇りを持って仕事をさせていただいています。

この10年間で最も心に残ることは、平成26年4月10日の新市庁舎の竣工式です。庁舎問題は、自分にとって就任以来8年越しの、最も苦しんだ課題でありました。特に感慨深かったのは、その日の午後に行われた市民内覧会に、予想を大きく超える300人も市民の皆さんが足を運んでくださったことです。新庁舎1階の受付前に入りきれないほどの人ばかりでした。「完成を待ちわびていた」との声も聞かれ、多くの市民の皆さんの期待があったことを改めて感じました。

もうひとつは、熱海市が平成18年に「財政危機宣言」を行い、財政的に最も苦しい時に受けた、篤志家による多大なご支援です。現在の熱海のV字復活の要因はメディアプロモーションにあると言われますが、梅園の梅、糸川のあたみ桜、お宮緑地のジャカラランダといった熱海の宝に磨きをかけていただいたからこそ、はじめてできたプロモーションです。この熱海三大花木の整備を平成19年から7年間の長期にわたり支援していただきました。私はこのご恩を決して忘れません。市民の皆さんにも私と同じ気持ちでいて欲しいと思っています。

この10年間、本当に多くの方々に助けられてここまでやってきましたが、まだ、観光・商業振興も、住まうまち熱海づくりも課題が山積です。「新生熱海の実現」を目指し、これからも一歩一歩前に進んでまいります。



熱海ブランド

熱海市長 齊藤 栄

熱海の「食のお土産」に対して、ブランド認定事業を始めて6年目となりました。かつては熱海のお土産といえば温泉饅頭と干物以外に何があるのかなどと揶揄されたこともありましたが、今では43事業所の97品目の商品が認定を受けています。売り上げも上々で、11月に完成予定の新熱海駅ビルに出店する予定です。

先日、商品の認定審査会が行われた際、特別招聘審査員の田崎真也さんの言葉が心に残りました。「商品のレベルが毎年着実に上がってきている。そしてこのような事業を続けることが、熱海全体の食のレベルを上げていく」という言葉です。「大きな目標は一朝一夕では実現できない。一步一步進むしかないのだ」と私には聞こえました。

熱海は過去10数年来で最も多くのお客様を迎えるようになりました。今最も大切なことは、来遊されるお客様が大きな満足を感じて、「また熱海に来たい」と思っていたただくことです。そのためにはお土産や食のみならず、ホテル・旅館やタクシーの接客レベル、そして市民の皆さんの接遇レベルも上げていく必要があります。また、歩いて気持ちが良いと感じる遊歩道の整備や、飲食店の快適な洗面所など、ハード（施設）のレベルも上げていかなければなりません。

満足度を上げることは簡単なことではなく、長い時間と努力を必要とします。しかしこのことなくして「日本でナンバーワンの温泉観光地」は生まれません。この高い目標に、できることから着実に、そして継続的に取り組んでまいります。



伊豆と湘南

熱海市長 齊藤 栄

「湘南」と聞いてどんなイメージをお持ちますか？神奈川県相模湾沿岸地方を指しますが、最近、伊豆との関係がますます近くなってきました。

先日、熱海を経由して小田原・下田間を走る、JR東日本によるリゾート列車「伊豆クレイル」の運行がスタートしました。週末と祝日に一日一往復、伊豆の食材を使った食事に加えて、車窓からの景色もゆったり楽しめるよう設計されたおしゃれな列車です。運行初日は、熱海駅で歓迎の横断幕を掲げながら、芸妓衆、こがし祭りの天狗ほか、多くの観光関係者と共に、乗客の皆さんのお出迎えを行いました。車内の様子はホームから伺うことができ、皆さん驚きとともに大変喜ばれていました。この夏の予約状況は上々のようで、今後のさらなる人気が期待されます。

一方、湘南と伊豆を結ぶ道路の整備には大きな課題が残っています。残念ながら、ゴールデンウィークや夏の行楽シーズンになると決まって、「伊豆へ行きたいけれど渋滞するから」という声を聞きます。この問題を解決するのが、湘南方面から熱海を経て、三島・沼津方面を結ぶ新たな道路、「伊豆湘南道路」の整備構想です。伊豆半島の背骨となる伊豆縦貫道路の整備が着々と進む中、その肋骨の位置づけです。現在、関係する4市4町の関係者とともに、熱海市が中心となって、その整備を国や県に働きかけています。

より多くのお客様が、より快適に、そして楽しく伊豆を訪れていただけるよう、伊豆と湘南をつなぐプロジェクトに今後とも力を入れてまいります。



ATAMI ジャカラнда

フェスティバル2016

熱海市長 齊藤 栄

6月中旬から下旬にかけて、「ジャカラндаフェスティバル」を開催しました。2年前にお宮緑地にジャカラнда遊歩道が完成してから、初めてのジャカラндаPRイベントとなります。ジャカラндаとは、南米原産の世界三大花木のひとつで、6月に青紫の美しい花を咲かせます。1990年（平成2年）に、ポルトガルのカスカイス市と国際姉妹都市になったことが縁で、熱海市での植栽が始まりました。現在、市内に高木32本、苗木110本が植えられています。

オーブニングは、初夏を思わせる日射しでした。熱海梅園の梅、糸川のあたみ桜とブーゲンビリア、そしてお宮緑地のジャカラндаの整備に多大なご支援をいただいた篤志家の方も来賓として参加されました。会場では、ジャカラндаを見たり、写真を撮ったりするための来遊客が途絶えることがなく、その様子をご覧になって大変喜んでいらっしゃいました。「ジャカラндаはまだ幼木だが、数年後には熱海で一番の名所になるかもしれない」と話してくださいました。

ジャカラндаの整備により、熱海の象徴的なスポットであるお宮緑地はよみがえりました。しかし、ジャカラндаの知名度はまだ低く、どんな花か分からないといった声も多く聞きます。毎年、開花の時期にあわせて、宮崎県日南市、長崎県雲仙市とで行っている「ジャカラнда・サミット」は、来年は熱海での開催を予定しています。3市が協力して、ジャカラндаの全国PRに取り組んでまいります。



おでかけバス

熱海市長 齊藤 栄

5月12日から、「熱海市おでかけバス」がスタートしました。定期路線のバス停から遠い、和田木地区、中野地区、桃山・伊豆山地区に住む高齢者などの皆さんに、市役所までを結ぶマイクロバスを週1回運行し、外出機会と外出手段を提供するものです。対象者であれば、月500円で利用できます。往復の利用はもちろん、往路のみ、復路のみの利用もできます。

運行初日の和田木地区と、翌日の桃山・伊豆山地区のバスに同乗しました。当日は天気がよく、会話も弾み、車内はまるで「遠足へ向かうバス」のように明るかったのが印象的でした。外出の目的は買物、通院、行事への参加などさまざまだと思いますが、「今日はおでかけバスが出る日だから、街に出ましよう」と誘いあわせてもらえたらいいなと感じました。地区を巡回した後、終点の熱海市役所前に到着すると、皆さんが笑顔で下車され、それぞれの目的地へと向かわれました。「楽しみが一つ増えた」と言ってくださる方もいました。

この事業は始まったばかりで、3地区とも利用登録者数はバスの定員の半数程度しか集まっています。今後は、外出したいなと思っていただくためのアクティビティ（活動）などを提案していきたいと思います。ご近所の方など、対象なのにまだ利用していないという方が周りにいらっしやいましたら、ぜひお声がけいただき、ご活用いただければと思います。これからも利用者の皆さんの要望をお聞きしながら、より良いものにしてまいります。

市長メッセージ100



第100回の市長メッセージ

熱海市長 齊藤 栄

市長就任以来、広報あたみに連載してきた「市長メッセージ」が今回で第100回を迎えました。原則月に1回のペースで、市政に関して、時にはプライベートな事柄も含めて書いてきました。

しかし、毎月書き続けることは、実は容易なことではありません。原稿の締め切りは月末の月曜が多く、日曜の日中は公務が多かったので原稿を書くことが真夜中になることもありました。しかし、私の思いを市民の皆さんに伝えたいとの思いから、文章を書くのは不得意ながらも一生懸命書いてきました。ですから、「市長さんのメッセージ、毎月読んでますよ！」と言われるときは本当にうれしいです。

これまで過去に書いたメッセージを読み返すことはほとんどなかったのですが、今回100回分を全て読み返してみました。ちょうど10年前の第1回「市長に就任して」に始まって、「財政危機宣言」「GW中の大規模断水」「東日本大震災」「新庁舎の完成」などなど、当時の記憶がまざまざとよみがえりました。そして、今読み返してみていることは、政策そのものよりも、その背景にある、市長として自分は何を大切にしているのか、どういう方向を指しているのかを伝えることが重要であるという点です。読み手もそこを期待しているのではないかと感じました。

これは「広報あたみ」についても言えることです。単にさまざまな情報を市民の皆さんにお伝えすることだけでなく、市は今何を考え、どういう思いや方針を持っているのかについてご理解いただくことが重要です。今後は、今まで以上に市からのメッセージが伝わる「広報あたみ」を目指してまいります。



福祉センター浴室のリニューアル

熱海市長 齊藤 栄

熱海市総合福祉センターの中に温泉があるのをご存知でしょうか？60歳以上あるいは障がいのある市民の皆さんが、無料で利用できます。

この度、この浴室を改修しました。浴室内のタイルを張り替え、洗面台を大きくし、ドライヤーも新たに置きました。特別大きなお風呂ではありませんし、豪華でもありませんが、以前より明るく快適になったと思います。市役所内で温泉が楽しめるとは非常に珍しい話ですが、温泉地に住まう特権ではないでしょうか。

また、新年度から市内3地域にお住まいの高齢者の方を対象に、試行的に貸し切りのマイクロバスを走らせます。週に一回、市の中心部までバスが往復します。買い物や病院、図書館、料理教室への参加など、外出の機会はさまざまあると思います。ご近所の方とも声を掛けあって、ぜひ積極的にご活用いただきたいと思います。

高齢者の皆さんの健康維持や、人のつながりを保つという観点から、外出の機会を持つていただくことはとても大切です。行政も外出の機会や居場所づくりを進めるとともに、交通手段を補完していきたいと考えています。浴室のリニューアルも、外出の一つのきっかけになることを期待したものです。試行錯誤を繰り返してノウハウを貯めながら、熱海市が高齢者の皆さんにとって「外出しやすいまち」となるよう努めてまいります。



I P P O あじろ園オープン

熱海市長 齊藤 栄

2月22日、療育教室「I P P O（いっほ）あじろ園」がスタートしました。療育教室とは、発達の遅れやその心配のある幼児を対象に、発達や集団性・社会性などを伸ばすための教室です。網代幼稚園内に開設し、市内では初めての療育教室になります。I P P Oには「始めの一步」「小さな一歩」の意味が込められていて、気軽に利用してもらえること、より柔軟に子どもたちをサポートできることにこだわりました。

今、発達障害や社会生活に適応できない子どもたちが増えてきていると言われています。子どもたちにとって最も大切なことは、療育教室のように専門的な指導の受けられる場所で、一日でも早く適切なサポートを受けることです。少しでも心配や不安があったら、親御さんが気軽に相談できる、同じようなお子さんを抱える親御さん同士で話ができる、そういう場に「I P P O あじろ園」がなっほしいと思います。

市の単独経費での運用となりますが、利用者にとっての利用しやすさなどをトータルで考え、運営の柔軟性を確保するため、制約の多い、法律に基づく事業所にはあえてしませんでした。近隣ではまだ珍しい試みです。

先日、障がい福祉をテーマとした全国最大規模のフォーラムに参加し、熱海での「福祉のパイロット（先駆的な）事業」の実施を事業者などに呼びかけてきました。「住まうまち熱海づくり」に向けて、福祉の分野でも新たな挑戦をしていきます。



テレビ取材

熱海市長 齊藤 栄

東京の某テレビ局から「熱海V字復活の理由」というテーマでインタビューを受けました。熱海が今、そのように見られているのはとてもうれしいことです。市内各所で取材が行われたようですが、私はほぼ満開のあたま桜でピンク色に染まった、糸川べりで受けました。

『ADさんいらっしやい』を始めて4年が経ち、メディアへの露出の効果がようやく出てきたこと。しかし、梅園の大改修は9年前に、また糸川のあたま桜の整備は7年前に始まっています。大切なことは熱海の宝を磨くこと。そのことをコツコツと行ってきたからこそそのV字復活です。そのようなことを答えました。

今後真剣に取り組まなくてはならない大きな課題として、来熱客の満足度の向上があります。旅館やホテル、飲食店や土産物店、そして市民総ぐるみでお客様の満足度を上げていくことが、熱海をさらにワンランク上の観光地にするための課題です。ちょうどそのインタビューの際に、黄色いジャンパーを着た、熱海まち歩きガイドの会のメンバーの方が横を通られ、一市民として観光客に熱海を案内する活動をPRされていました。

来熱する観光客にとって、熱海は、海・山・島、温泉、梅・桜といった自然の恵みだけではなく、美味しい地の食事も、道を聞いたときの市民の感じの良い応対、きれいに掃除のされた路地など、熱海で接する全てのもので構成されています。市民一人ひとりの努力で「熱海に来てよかった」と思っていただけのように取り組んでいきましょう。